

大宰府アカデミー・令和編 第12講 令和6年3月20日(水・祝)質問及び回答(Q&A)

「大宰府と東アジア」

講師・回答：田中 史生先生(早稲田大学文学学術院教授)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 国際交易の窓口であった大宰府には、多くの「ひと」や「もの」が入ってきました。その際に疫病も入ってきたのではないかと思います。そうした事例があれば教えてください。また、その対策も教えてください。

A/ 回答

735年(天平7)、大宰府管内から流行が広がった天然痘は、翌年一旦収束しますが、737年にやはり大宰府管内から第2波が起こります。これにより都でも多くの死者を出しますが、この天然痘流行の対策に関して、最近、平城京跡の発掘調査をふまえた大変興味深い知見が示されています。この時、権力者であった藤原四氏も命を落としたことはよく知られていますが、その一人、藤原麻呂の邸宅で使用されていたとみられる食器が、邸宅外に掘られた穴に一括して廃棄されていたことがわかりました。これは感染者が使用した食器を一気に廃棄することで、感染拡大を防ごうとしたものとみられています。この時、人々はまじないなどを盛んに行い、天然痘を防ごうとしていました。その一方で、疫病が食器などで感染拡大するという「科学的」な認識も持っていたようです。

また都では、872年正月、「逆咳病」が流行し、これが前年末にやってきた渤海使の「異土の毒気」のせいだと噂されました。この病はインフルエンザではないかともいわれています。この時の渤海使は加賀に到着しているため、大宰府と直接の関係ありませんが、古代の人々は、疫病が人の移動とともに海外からもやってくると警戒していたようです。この時は、都の内裏の建礼門前で大祓が行われました。

Q/ 日本は海に囲まれていることから、大宰府とまではいかななくても、半島や大陸と交易を行っていた場所があったのではないのでしょうか。そういうところがあれば教えてください。

A/ 回答

古代の大宰府の時代（奈良・平安時代）に限れば、講義の中でもお話したように、来航した外交使節が交易を行う場所は、主に都であったと考えられます。平安時代に商人が盛んに来航するようになると、大宰府が管理する鴻臚館、次いで博多がその中心となりました。ただし渡来商船は、博多湾までの行き帰りの寄港地、例えば唐津湾や五島列島などでも交易を行っていたとみられます。また例えば9世紀は、有明沿岸部の有力層が新羅人と通じていることが問題となったように、新羅系交易者の船は、有明海側へも入っていたと思われれます。さらに最近、長崎県大村市の竹松遺跡において、9～13世紀を前後する時期の中国陶磁器、高麗青磁、朝鮮製無釉薬陶器などを含む多くの渡来文物が出土し、注目を集めました。ここにもおそらく商船が来航していたのでしょ。私は、博多で貿易を行った渡来商人が、その後、鹿児島や喜界島へも向い、硫黄や貝殻などの南島産品の交易を行うこともあったと考えています。

また特に11世紀半ばから12世紀前半は、宋商船が北陸に来着する事例も目立ちます。その背景はまだよく分かっていませんが、消費地である都へのアクセスの良さなどが考慮されていたと考えられています。

平安時代の日本列島における国際交易の中心地は、なんといっても博多です。しかし以上に見たように、その他の地域にも交易者は渡来していました。ただ、文献史料が乏しく、その実態は謎に包まれています。日本列島では、商船の渡来や交易品の流通が、どのような環境・構造・ネットワークのもとに展開していたか、世界史と地域史の視点から読み直す必要があると感じています。

※ ご質問ありがとうございました。